

す。予告もなく、突然帰りましたので、家族は「よく生きて帰れたなあ」と驚くやら喜びでいっぱいでした。祖父母・父母・弟妹、皆に迎えられたことは、幸せであったと思っております。

自動車第二十六連隊と

中国の思い出

京都府 大槻 二夫

私は大正十一（一九二二）年七月、綾部市で生まれましたが、父親が船の関係の方の仕事をしておりましたので、ほとんど京都の山代の方に住んでいました。その関係で中学は京都府立桃山中学校に入学、昭和十五年（一九四〇）年春に卒業しました。卒業式の日は三月十日の陸軍記念日でしたが、その時は既に私は大連に上陸し、三月六日にはもう北京に行っておりました。

それから一カ月ほど張家口の方で実習などをしてお

りましたが、小さい学校ですが、四月から北京中央鉄道学院と言う華北交通が国策で作っていた学校で、そこに入学、約二年間、土木工学を勉強し、卒業と同時に華北交通の本社へ勤務しました。

この華北交通本社勤務中、昭和十七年徴集兵として、北京の第一小学校で徴兵検査を受けました。その頃、私は過労気味で、ずっと北京の病院に入院しておりました。一人では到底徴兵検査には行けるような体ではありませんでしたので、看護婦に付き添われて洋車に乗って検査会場に行きました。しかし、徴兵官の陸軍大佐からは「この体なら、大丈夫だ、第一乙種だ」と言われて、甲種ではなかった訳です。

入隊は昭和十八年二月、山東省済南市郊外に連隊本部のあった自動車第二十六連隊（仁第四二二四部隊）にもちろん現役で現地入隊しました。

済南というところは、山東省の首都で、ちょっとした中市でした。大体人口は百万人と言われ、そのうち日本人は約十万人おりました。どこへ行っても日本

人が在住しておりましたし、中国人の友人もたくさんできました。

そのような環境で、私は現地入隊しましたので、何か兵隊に行っても、自分が生活し学んだ中国の国土の中で戦争をするのだという気持ちは、私自身とても割り切れるものではありませんでした。自分が自分の生活の場である中国の土地を走り回って、そして戦争をして弾丸を撃ち合うなんて、とても考えられなかった。多少そこに精神的な迷いというものがありました。

ともかく済南で幹部候補生としての教育も二年ばかり受けまして任官、半年ほど掃討作戦なり、あるいは河南方面から中支方面の開封、鄭州などの作戦に自動車隊として参加しました。

自動車隊というものは、第一線で鉄砲を撃ち合うような兵科ではないので、そういう第一線の兵隊を送ったり、あるいは食糧なり慰問品なりを前線の部隊へ輸送するのが任務でした。もちろん、兵隊は三八銃を持ち、私は腰に小さい拳銃を持っておりましたけれど

も、こんなもので撃ち合うことはめったになかったです。

そういう中で、主として済南で教育を受けた訳ですが、入隊してからだんだん戦場は南へ移りまして、連隊ごと河南省、黄河の南の方へ転戦して行きました。列車で輸送されたり、自分で走ったりして河南省方面に行って、開封、鄭州、南陽方面まで、戦闘をすべく輸送任務に就きました。

そういうことで戦争らしきものをしてきた訳ですが、その中でももちろん、中国軍の襲撃を受けたこともあります。その頃は既に、ほとんど飛行機を警戒しての夜間の行動で、前照灯（自動車の用語は横文字は禁止されておりまして、ヘッドライトなどと言うと叱られました）を点すこともなく、暗い夜道を自動車に付けた白旗を目当てにして行進するような状態でしたので、歩いているのと同程度の速度でした。しかし、自動車は多くの物資や人員を輸送できるといふことだけでした。

時には山の中腹からのろし火を上げられまして、中

国軍、俗に北支では「パロー」と言っていました。その八路軍（共産軍の名称で中支では新支軍と言っていました）が撃ってきたり、ほかには中国には雑軍というのがありましたので、所々で、このような雑軍の攻撃を受けたこともあります。麦畑の中から俄かに銃を構えて飛び出してくるというようなこともありました。

ある時、襲撃を受けて、どうしようかと思っておりますと、前の暗闇の中に日本軍の戦車が一台、故障して止まっております、相当の階級の人が戦車長でおられたようですが、その方にはゼロ距離射撃をして頂きまして敵を追い散らし、私の隊を助けていただいたこともありました。

また自動車隊は、長距離を移動する時は、列車に搭載して遠くへ移動するのですが、目標になりやすいので、米軍のP51あるいはB25という、優秀な米兵の乗った爆撃機に襲われたことも度々ありました。列車の上に自動車を搭載している訳ですから逃げようもありませんので、自動車はそのままにして、民家の影に隠れて飛行機から射撃される曳光弾あるいは鉄甲弾

（向こうの飛行機の弾丸はプロペラの回っている間から五種類の弾丸がでると、その当時言われていた）を避けていました。弾丸には曳光弾、当たったら炸裂する弾、貫通する弾などがありますが、それを見ながら、隠れていました。幸い飛行機の方が去って行き、自動車も兵隊も損害なく目的地に移動できた訳です。

時には河南作戦の最中に前方にある野戦郵便局への郵便物あるいは甘味料、食糧等を輸送したのですが、ようやくその部落へ着くという一歩手前で夜明けになりました。私は先頭の車に乗っていたのですが、後から来る伊藤兵長の車はもう少しで部落へ入るといいう一歩手前で米軍機の急降下爆撃を受けまして、ハンドルを握っていた右手の指を全部やられました。そして鼻も削られました。

左手はちょうど飛行機を見てブレーキ、変速なりの操作をしておったため助かったようでした。

このことは連隊長にも報告しましたが、前線への郵便物や糧秣を輸送するという作戦目的は貫徹したのだということ、口答ではありましたが、慰められたこ

とを記憶しております。その兵長は三重県出身の方でしたが、陸軍病院へ後送されまして除隊されたということの後で聞きました。戦争で右手をやられ、鼻を削られ、戦傷兵として後方へ下がった訳です。

このように自動車部隊として華々しい第一線のような戦争はいたしませんでしたが、軍の大きな作戦行動という状況の中での輸送作戦を分担した任務を遂行するために努力と苦勞をいたしました。

しかし、前述しましたように、私は中国で学び、中国に職場があり、私の生活の場である中国、北支で軍隊という職業で仕事をしたという一年八カ月でした。

そのため二年間学んだ北京中央鉄道学院には中国人もおりましたし、いろいろ生活の上からも周囲の現地人との付き合いも多く、当然中国人が多かったです。

終戦は黄河南岸、鄭州にて知らされました。そして昭和二十年九月末、石門にて退役し、華北交通本社に復職したのですが公職からの追放に遭い、在外一般邦人の生活を経て、一般邦人として昭和二十一年三月、

米軍上陸用舟艇母艦LSTにて山口県仙崎港に入港、帰郷いたしました。

中学を卒業した昭和十五年三月から昭和二十一年三月に内地へ帰還するまで、ちょうど六年間、中国にいたけれども、私の生活の大部分を占めた中国で戦争をするということは、前述しましたが、私自身の気持ちのうえではいつも割り切れない感情がありました。たくさん中国人の友人や会社の人もおりました。非常に懐かしく、また私を育ててくれ、社会の第一歩を踏んだのは中国、北京であったという感情は、今だに持っております。

以上、私はあまり生々しい戦争の経験はしておりません。民間人として中国に渡り、そして同じ中国で、ある期間戦争に参加し、また終戦前に元気で除隊しまして、また北京で生活し、終戦後民間人として引き揚げてきました。半分中国人のようなものです。

今もテレビその他で北京などの映像や写真等が出ますと、あそこはこうだなどと思ひ出します。だいぶ建

物も昔とは事情が変わっておるようですが、しかし天安門の広場をはじめ、あちこちに思い出があります。

私の最も親しく、お互いに信じ合っておりました中国人は、本当に私が地方人として北京から引き揚げて来る時に、何気なく言ってくれました、「ダークイ（大槻）、ダークイ、また必ず来る時がある」と言ってくれました。「日本人が来てくれる時が必ず来るから、その時は喜んで迎えるから来い」と言ってくれました。本当に涙を流して送ってくれたことを頭の中に覚えていきます。

当時は汪精衛という日本寄りの中国人もいましたが、終戦になってからは蒋介石で、その後、今の中国共産軍が蒋介石に代わって大陸の方を治めており、蒋介石は台湾省に移っています。その台湾に行きますと、台湾は中国の一部なのだ、中国の大陸を含めての中国であって、台湾は一つの省なのだ、私ども観光客にも説明していたことを記憶しています。

今後とも折があれば、中国へ行きたいと思っており、昔いた家やら寮へ足を運びたいと楽しみにしています。

ます。

死線を越えて

京都府 四方 ふじ枝

私の夫、四方為夫は平成九（一九九七）年五月三十一日、八十八歳でこの世を去りましたが、亡くなるまで御国の為にと、種々の仕事を通じてご奉公して参りました。

夫は支那事変のみ参戦しております。昭和十二（一九三七）年八月二十七日、五人の子供を残して福知山歩兵第二十連隊に応召、入隊致しました。

以来、中国各地を転戦し奮戦しておりました。ここにありまず第十一軍司令官岡村寧次大將より頂いた感状がその一端を物語っていると思えますし、功五級金鵄勲章も頂戴しておりますので、勇戦奮闘してくれたと思えます（掛軸になるような大きい立派な感状で功績が詳細に明記してあります）。